アンナプルナ農園について

　娘が三歳の時、家族でネパールのカトマンズに住んでいました。まだレストランやホテルも少なく、郊外では静かな田園地帯が広がるのんびりした街でした。メインストリートの人や力車はにぎやかでしたが、車はあまり見かけませんでした。

　ある時ビザを取るためインドへいったん出ることになり、私たちは陸路でカトマンズからポカラ、ルンビニ、そしてインドへ入りました。途中のポカラからは 8000 メートルものアンナプルナ連峰が望めます。ポカラの標高は 900 メートルなので、7000 メートルもの標高差を間近に仰ぐ世界で一番美しいと思う町です。

　当時ポカラにレストランは一軒しかなく、湖のほとりに小さな掘立小屋がポツンとあっただけでした。行くたびに建物が競争で乱立して旅行者が押しかけていましたが、アンナプルナの山々はいつも変わらず美しかったです。

　インドのラジギールの仏教寺院に宿泊させてもらっていた時のこと、夫が病気になり動けなくなったことがありました。境内の菩提樹にブランコが吊るしてありました。ある日、娘がブランコを押してくれとせがみましたが、夫はその力がなくて歩けませんでした。娘は悲しそうにお父さんを見上げていました。遊びたくて仕方ないけど旅に連れ回されて遊び友達もいません。夫は悲しくて泣き出してしまいました。泣きながら「ごめんごめん」と謝ると娘は「父さんお花のいっぱい咲いているところへ行こう」と言ったのです。そんなこともあって旅をやめて自給の農園を作ろうと日本へ帰ってきました。

　熊本市内でレストランを始めた時は大好きなアンナプルナの名から「アンナプルナ農園レストラン」としました。アンナは（食べ物）プルナは（満ちている）という意味で豊穣の女神様の名前です。

　世代交代して今では娘夫婦は農園にお花をいっぱい植え、お米や野菜お茶も育て、イヌやネコも一緒に暮らしています。

　物質文明が崩壊しようとしている今、何よりも自給した食べ物を食べ、水源からの水を飲み、自然の中で風に吹かれて季節の可愛い野の花を愛でて、貧しいけれど、豊かさを感じる暮らしをしていることをありがたく思います。夕暮れ時、「すべての生き物たち　幸せであれ　すべての生き物たち　幸せであれ」と今日もお釈迦様の慈しみの歌を祈りながら歌っています。（ちこ）